

誤 解 の ル ー ト

—外在的意味の語の理解について—

藤 掛 庄 市

第一章 外国語の外在的意味の理解方式

Carp, pig, cucumber, adder, newt, bracken, cuckoo, witterrick, これらの語の意味を云えと云われてもし知らなかつた場合、人はどうするであろう。辞書で調べるか、人に教えてもらうしか仕方がない。いまかりに carp を知らないとしよう。先ず英々辞典で調べてみる。OED にはこう書いてある。

A freshwater fish, *Cyprinus carpio*, the type of the family Cyprinidae; introduced into England as early as the 14th c., and commonly bred in ponds.

池にいる魚だということは分るだろうが、はたしてどういふ魚かざり分らんというのが正直な話でなからうか。それで、英和辞典を見る。研究社の大英和辞典。「1. こい (*Cyprinus carpio*) 2. こい科の各種の魚」とあるだけである。がわれわれ日本人には英々辞典の長い説明より、この日本語二字で充分なのである。なあんだ鯉のことか、こんなことなら始めから英和辞典をひいておけばよかつたということになる。辞書でなくて英米人に訊ねれば、彼らはむしろ口で説明することに困難を感じ、出来れば実物かその写真や絵でもつて、これがそうだと指示する方を選ぶであろう。するとわれわれはなあんだ鯉かと分つてしまう。絵入り辞典ドゥーデンをひいてもその絵を見れば、ああ鯉のことかということになる。これを英語を知っている日本人に訊

ねれば、いろいろ説明する前に、それは鯉のことだよと答えるだろう。ここでもまた carp とは鯉のことか、carp の意味は鯉かという理解が成立つ。先にあげた10個の語の意味とは、従つて、鯉、ブタ、キュウリ、毒ヘビ、イモリ、わらび、カッコウ、イタチであると理解されるだろう。

実は、これらの語は全て、外在的意味（外延とも云う）を持つ語である。あるいは後に論ずる点を考慮に入れて云えば、外在的意味が顕著な語である。S. I. ハヤカワ氏の説明に従えば、「あるコトバの⁽¹⁾外在的意味は、それが外在的世界において指す、または指示するものである。即ち、外在的意味はコトバでは言い表わせないあるものである。それはコトバが代表しているものだから、これを記憶するやさしい方法は、外在的意味を言えと言われた時は、いつでも、自分の口を手でふさいで、指でさせばいい。⁽²⁾」



図 I.


それゆえ、前述の語は全て、いろいろ説明するよりも、実物を指で示せばよかつたのである。ところが、ここが大事な点であるが、自分の国語の中で外在的意味を理解するには、このような方法しかないが、外国語の中の外在的意味を理解する場合には、(carp

の意味は鯉だと云えば分つたように) 自国語への云いかえによつて理解が成立してしまうのである。そうした方が手つとり早い。たとえ carp の指示物 (外在的意味) である



このような姿をしたものを指し示して、これが carp だと云つても、われわれ日本人の言語中枢で起ることは、それを見て「ああ鯉か」という、それまでに日本語の体系の中で確立されている、このコトバとその指示物である実物との条件反射の体系であろう。つまり、あくまでも、carp とは鯉の⁽³⁾ことだという理解作用を行なわざるをえない。

(誤解のないようにつけ加えれば、特に外在的意味の場合について、本論は述べているのである。そうでない、愛とか真理という内在的意味が全てである、いわゆる抽象語については別に考えたい。)

そうすると、われわれが、carp と鯉、その他の語について行なつた理解作用は、まず「理解できないシンボルにぶつかつた時には、もしそれに関心があれば、われわれは、その指示物が同じであり、かつわれわれの理解しうるシンボルを選ぶ。」(今の場合、理解できないシンボルとは carp であり、理解しうるシンボルは鯉である。その指示物は  という姿をした、英語では carp、日本語では鯉という名をもつ、魚のことである。)

「ここまではよいのであるが、そのあとに続いて起ることが、前述のように、反射的に carp は鯉であるという理解作用なのである。ほんとうは「わたしはシンボル A (carp) の意味するものを知っている。それはシンボル B (鯉) と同じものを意味している」というべきなのである。「生徒が chien とは dog のことである」といつたとすれば、実は 'chien' と 'dog' とは同一物を意味するというべきである。」⁽⁴⁾

この関係を図示してみよう。

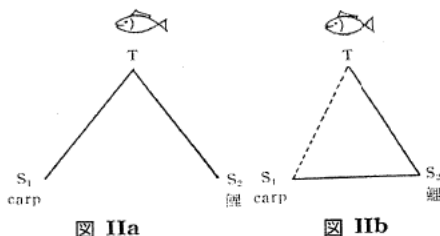


図 IIa の示すのが、後者の場合で、一般化して云えば、T のことを外国語では S_1 といい、自国語では S_2 という。 S_1 も S_2 も T のことをいうのだという理解作用である。ここにおける思考の流れは $S_1 \rightarrow T \leftarrow S_2$ であつて、 S_1 と S_2 とはつながらない。T のところでぶつかり合う。それを、carp とは鯉のことであるという理解作用をしていると、それは図 IIb の関係になつて来る。外国語の S_1 は自国語の S_2 のことである。 S_2 は T のことであるという理解作用である。思考の流れは $S_1 \rightarrow S_2 \rightarrow T$ となる。点線が示唆するように S_1 と T との関係は識閥にのぼらない。

われわれが、外国語を理解する時、すくなくとも外在的意味の語を理解する時、未知の語・シンボルにぶつかつて、それを前述のようにして知る時の理解作用は図 IIb で表わされる過程を辿る。これが翻訳を読んでいる場合は、翻訳者が、 S_1 と S_2 との関係について、 $S_1 \rightarrow T \leftarrow S_2$ の後 $S_1 \rightarrow T \rightarrow S_2$ の過程を辿つたにしろ (この方が望ましいが)、 $S_1 \rightarrow S_2$ の過程を辿るにしろ、とにかく S_1 から S_2 にいたる過程は読者の全く関知しないことで、読者の理解作用は図 IIb の場合の S_2 と T の関係に限定されている。

以上、われわれ日本人の外国語の理解方式を考えてみた。事実普通はこれで通つているし、特に外在的意味の語の場合にはこれで差支えないように考えられる。が果して、それでよいものか。不都合は生じないか。いまこの

ことについて考えてみたい。

第二章 その一 意味の「意味」

オグデン・リチャーズは共著『意味の意味』で、ことばの意味作用の構造を下のような三角形を使つて表している。(カッコ内は、ピエール・ギローが補つたもの)⁽⁵⁾




図 III

この図の意味するところでは、「意味」というものは、シンボルと指示物との関係の外在的意味だけでなく、図 III で示されるような関係にたつレファレンスを含むものである。レファレンスとは、心的過程を指示物に結びつけている一組の外的(ことばの世界から見)ならびに心理的コンテクストである、と説明されている。

これにウルマンの説明を加える。「言語学的にもせよ、言語的でないにもせよシンボリズムの全行為は、次の三要素の存在を必要とする。能記(シンボル)、所記(レファレンス)及び指示物。物は言語の外の世界に属しているので、意味論は能記と所記との関係を明らかにすることに自ら甘んずる。能記(ここでは名と呼ぶことにする)と所記(ここでは意義と名づける)との間には相互喚起の関係が存在している。(中略)この名と意義との間の相互喚起の関係が語の意味を構成するのである。⁽⁶⁾そして彼はこの彼の意味の定義と、オグデン・リチャーズの三角形との関係について大要次のように云っている。彼の定義は、指示物とレファレンスの関係、すなわち言語学的要素を含まない言語の外の世界の

関係を除いて、図 III の三角形の、シンボルとレファレンスとの関係という、言語学的な要素が直接含まれている唯一の辺側に自らを制限している。つまり、彼の意味の定義においては、オグデン・リチャーズが意味の構造の中にくみ入れておいた指示物を除いてしまつて、シンボルとレファレンスの間の相互喚起の関係のみが意味を構成するというのである。シュテルンが、「指示物が物的な物 material object である時、それは意味とは一致しない、意味は心理的統一体である。」⁽⁸⁾といつているのも同様の概念を示したものである。⁽⁹⁾

これらのことを考え合わせると、例にとつた carp の「意味」は、いわゆる外在の意味だけでなく、carp なるシンボル(名)と相互喚起の関係にあるレファレンス、換言すれば内在の意味を含むというのが、意味論でいう「意味」である。くり返して云えば、carp の「意味」は、その指示物  とむしろ関係なく、鯉の「意味」にも同じことがいえる。この 'carp' と「鯉」という二つのシンボルの「意味」は、それぞれのレファレンスにあるのである。(この二つのシンボルは、たまたま同一の指示物範囲 referential range をもつていただけなのである。逆に云えば、たとえ指示物範囲が違ついても、レファレンス範囲 reference range が同じなら「意味」は同じということになる。)

ところが問題なのは、普通冒頭にあげたような外在の意味の顕著な語においては、外在の意味が意味の全てであるにとられることが多く、二つのシンボルが外在の意味つまり指示物範囲を同じくする場合に、この二つのシンボルは同じ意味だと考えられるのである。それが間違いであつて、真の「意味」はむしろ外在の意味と関係なく、シンボルとレファレンスの相互喚起の関係にあるというのが、

今日の意味論の立場であると考えていいだろう。

いまこのレファレンス範囲と「意味」との関係を図示してみよう。シンボル S_1 のレファレンス範囲を R_1 、シンボル S_2 のレファレンス範囲を R_2 とする。 R_1 と R_2 との関係について、常識的に次の五つの場合が考えられる。



図 IVa



図 IVb



図 IVc

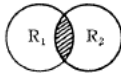


図 IVd



図 IVe

図 IVa は $R_1=R_2$ で、 S_1 と S_2 は全く同じ「意味」を持つと云える。

図 IVb は、 $R_2 > R_1$ で、 S_1 から云えば、 S_1 は S_2 と同じ「意味」を持つと云えるが、 S_2 からは、部分的に同じ「意味」と云えるだけである。

図 IVc は図 IVb の逆の場合である。

図 IVd はレファレンス範囲の一部を共有する場合で、「意味」を部分的に同じくすると云える。斜線で示される共有部分が大きいほど、「意味」は近づく。

図 IVe は全くレファレンス範囲を異にする場合で、「意味」は全く異なると云わねばならない。

このレファレンスと「意味」の関係から考えて、もし指示物を同じくする二つのシンボル（今の場合 'carp' と「鯉」が、指示物範囲だけでなく、レファレンス範囲も同じくする、つまり図 IVa の関係にある場合、あるいは少なくとも図 IVe の関係にあるのでな

ければ、この二つのシンボルは部分的の場合もあるとしても同じ「意味」を持つと考えられるわけである。では果して、外在的意味・指示物範囲を同じくする語・シンボルはいつでも同じレファレンス範囲を持つであろうか。図 IVa-e のうちどの場合がもつとも多いであろうか。

その二 同じ外在的意味の語の「意味」の違い

外在的意味の語の「意味」をレファレンスに求めることになつたいま、それを比較検討して「意味」を調べようという時に、このレファレンスをどうして調べるかという問題が先ず出て来る。レファレンスは、すべての表現が、もっているものである。正直いつて、オグデン・リチャーズがいうように、すべての表現のレファレンスを直接比較し検討する方法は現在のところない。しかし、少なくとも、ここで問題にしている、外在的意味の語に関しては、そのレファレンスを調べる手だてがある。

人間には、抽象的な観念を、なるべく具体的な、手にふれ、目に見える事物、すなわちここでいう外在的意味の語で表現しようという傾向がある。それゆえ、どの国語にも、抽象的観念を具体的事物に即して表わした比喩的表現が夥しくある。大体比喩的表現はそういうものかも知れない。試みに研究社刊「英語学辞典」の直喩の項を見る。代表的なものとしてあげてある百種類のうち八十近くが、具体的事物によるものである。スヴァルテングレンの「英語における強意的直喩」を見ても、身のまわりの動物、植物、鉱物、家具、食料品、人間の身体の部分、そういうものを使つた直喩が圧倒的である。このように外在的意味の語が、比喩的表現の中で表している観念が、そのレファレンスである（全てでは

なくとも)。常識的にそう考えて差支えなからう。

そういうことを考えて、スヴァルテングレンによつて、例にあげた冒頭の八個の語を調べてみる。それぞれ次のようにある。

carp (ignorant*), pig (greedy, lousy), cucumber (cool,* calm*), adder (deaf,* intimate*), newt (dumb), bracken (common), witterick (grinning), cuckoo (crabbed, lousy*)

これを日本語において同一の指示物を持つ語と比較してみる。斜字体のは、同じような比喩的表現を持つもの。*印をつけたのは理解しにくいもの。何にもないのは、そういう表現はないけれど分らんこともないものである。

こうしてちよつと見ただけでも、同一指示物もち外在的意味を同じくする二つのシンボルは、それが別々の国語の体系に属している時、全く同じレファレンス範囲を持つことは稀で、従つて外在的意味は同じでも、「意味」は違うということが、第二章「その一」の観点から考えて分る。

これだけでは、少々ものたらないかも知れないので、具体的な例を二三考えてみよう。

日本語では、二つのものがよく似ている時に、「うり二つ」という表現を使うが、英語では be as like as two peas (=eggs) とか Those twins are as like one another as drops of water. のような表現を使う。豆、卵、水滴はこういうレファレンスを持ち合わさない。

また「うりざね顔」という表現があつて、うりの種に似た顔即ち色白く、中高で、やや長い顔を美人のタイプの一つにしているが、英語のこれにあたる表現は、an oval face とか a classic face で、前者など興醒めである。もつとも英米では、顔よりも八等身とか

何とか、身体の方が美人の条件で、こういうのは美人でないかも知れない。とにかく、英語では、うりの種などにはこういうレファレンスはない。

うりときゆうりは違うかも知れないが、cucumber は cool as a cucumber のように使われ、全く冷静であり、自制心を失わず、感情の興奮を示さないことに使われる。Thucydides...is as cool as a cucumber upon every act of atrocity. (OED) しかし、「きゆうり」のレファレンスは、むしろ、顔の長い人にきゆうりとあだ名をつけるように、長いということにあつて、英語のようなレファレンスはない。

また今まで例にとつてきた 'carp' は、ignorant というレファレンスを持っているが、「鯉」はそういうレファレンスには無縁である。出世魚とされ威勢のよさを貰はれる。もつとも、ウォルトンの「釣魚大全」には、The Carp is the Queen of Rivers: a stately, a good, and a very subtle fish. とあり、全く悪いレファレンスばかりではないらしい。どうしてこういうレファレンスが出来るかという、carp は十四世紀に英国に入り、以来主として池で飼われていたという事情があるのだろう。そういう狭いところにおいて、「井の中の蛙大海を知らず」と同じ意味で ignorant というレファレンスを持つと考えられる。日本でも現在は池に飼われることが多いが、英国などのように当初からでなく、始めは河川にいて滝のぼりなどしていたので、ああいう威勢のよいレファレンスを持っているのだろう。OED の例文に、In the fish ponds are kept tame Carp, ... とか In rivers carp bite more boldly than in ponds. とあるが、以上のことを考え合わせるとおもしろい。広島カープがあまり弱いと「カープ」に弱いというレファレ

ンスが生まれて来るだろう。試みに、井の中の蛙といわれる「蛙」と同一指示物をもつ 'frog' は cold, naked という、「蛙」とは違うレファレンスを持つ。

もう一つおもしろい例をとろう。朝日新聞「すてんどぐらす」で英国の詩人ハロルド・ライト氏が、萩原朔太郎の詩集「月に吠える」を英訳する際の苦心談の一部を語っているが、その一つにホトトギスを英訳する苦労話がある。「ホトトギスはよく cuckoo と英訳されているが、cuckoo という単語には silly (おろかな) とか crazy (狂つた), foolish (ばかげた) という意味もあつて、ホトトギスのイメージとは違つてくる。」⁽¹⁴⁾ 和英辞典でホトトギスを引くと cuckoo と書いてあるが、英和辞典で cuckoo を引くとホトトギスとは書いてなくカッコウと書いてある。だからこれは別物であるといえる。しかし講談社刊の日本鳥類大図鑑によれば、カッコウもホトトギスもホトトギス目のホトトギス科のホトトギス属に属し、カッコウの英訳は Japanese cuckoo、ホトトギスは Little cuckoo であつて、色形は酷似し、単独で生活し、自分の巣を作らず他の鳥の巣に卵を委託するなど習性も全く同じで、ただ異なるのは啼声だけである。だから普通の人には啼声をきかないとカッコウかホトトギスか見分けがつかないはずである。それなのにハロルド・ライト氏も伝えるように、カッコウはああいう悪いレファレンスを持ち、ホトトギスは「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて冷しかりける」と道元の和歌にあり、さらには「かたみとて何残すらむ春は花夏時鳥秋はもみぢば」と良寛の歌にあるように、日本人にはホトトギスはよいレファレンスをもつ鳥である。

その他スヴァルテングレンのもの、あるいは OED や大言海、大日本国語辞典その他の国語辞典などで、いろいろな比喩的表現を調

べてみると、指示物範囲・外在の意味を同じくしながら、レファレンス範囲については、図 IVe あるいはせいぜい図 IVd の場合がぐんと多い。つまり、非常に多くの場合において、それぞれの国語体系における二つのシンボルが、同一の指示物範囲をもつていても、その「意味」を異にしている場合が大変多い。こういうことが、比喩的表現その他を通じて分るのである。

第三章 誤解のルート

第一章で述べたように、同一の指示物を持つ二つのシンボル S_1 と S_2 とが、異なる国語体系に属している時、図 IIb で表わされるような径路を辿つての S_1 は S_2 なりという理解方式は必然のことである。そして第二章で述べたように、 S_1 と S_2 とが「意味」を異にする場合が圧倒的に多いのも事実である。するとここに以下述べるような誤解のルートが開かれるのである。

このルートがどういふふうに通じているかということ、オグデン・リチャーズの三角形を利用して図解すると一目瞭然とする。

S_1 と S_2 の意味構造は、それぞれ次のように表わされる。(図 III 参照)

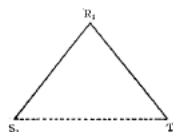


図 Va



図 Vb

指示物 T は共通である。従つて、図 Va と図 Vb は T を重ねることが出来る。次のようになる。T を頂点とする。

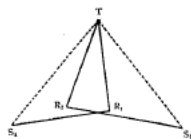
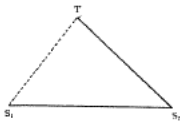


図 VI

本来ならば、 S_1 , S_2 , T の関係のわれわれの理解方式は、 S_1 , S_2 , T の関係が図 IIa で表わされている図 VI のよ

うにならねばならない。ところが、前述のように、われわれには図 IIb の理解方式が、ほぼ必然、無意識のうちに行なわれているのであった。するとわれわれの理解方式は下のようにならざるをえない。



参考図

→

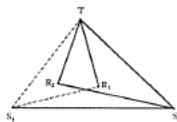


図 VII

S_1, S_2, T の関係が図 IIb のようになる。すなわち、 S_1 と S_2 との間に結びつきができていると、思考の流れが $S_1 \rightarrow R_1$ とならないで、 $S_1 \rightarrow S_2 \rightarrow R_2$ と流れ、図 Va の S_1 の意味構造は働かず、図 Vb の S_2 の意味構造に移ってしまう。 S_1 の「意味」が意識されず、 S_2 の「意味」のみが理解されるのである。われわれが理解すべきであるのが S_1 の意味構造であるのに、それが出来なくて S_2 の意味構造に移ってしまうとすれば、それはとりもなおさず誤解である。そして、この時、思考の流れが辿るルート $S_1 \rightarrow S_2 \rightarrow R_2$ 、これが「誤解のルート」である。(ただこういうことは云える。 R_1 と R_2 の関係が、図 IVa、少なくとも図 IVb, IVc の関係にあれば、このルートを辿つても、結果的には誤解にならない。)

われわれが、日常行なっている外国語の理解作用に必然的に伴なっている誤解作用は、常識的に気づかれており、当然あることとも考えられているが、ただそれがどういふふうにして起っているかということが、オグデン・リチャーズの考えた意味構造の三角形でもつて考えると、よく理解されると思うのである。

附 記

本論では、誤解のルートの必然性を述べた

が、そのルートを辿ることは、第一章で述べたような径路の理解方式をしている以上、必然なこととしても、それが、最後でちよつと触れたように結果的には誤解にならない場合もある。すなわち二つのシンボルのレファレンスが一致している場合であった。

そこでこういうことが考えられる。レファレンスが一致していれば、たとえ誤解のルートを辿つても、誤解にならない。とすればたまたまレファレンスの一致するものは幸いそれでよいとして、違うものでも一致させれば誤解を免れうる。しかし、ある発言、ある文学作品などのレファレンスを理解しようという時、そのレファレンスは、その発言者、作家のもので、その発言、作品のうちにすでに存在しているものである。従つて、レファレンスを一致させるといつてもそれは、発言、作品のレファレンスはそのまま固定したもので、理解する側が、自己のレファレンスを捨てて、前者のレファレンスを会得しようとするのである。文学作品その他につけられる解説とか注、エメンディションは、理解の対象のレファレンスを明らかにして、理解者がそれを理解することによつて、レファレンスを一致させようという努力である。

しかし、そういう努力はどこまで可能であろうか。この問題にある程度の究明を与えてくれると思われる二三の新聞記事と他の学問分野の二つの概念を紹介してみたい。

先頃の朝日新聞で「愛国心と母国語」と題して、ブラジル生活昭和12年以来27年間にわたる古谷綱俊氏が書いてみえる。氏によれば、日本人たることを決定する要素は文化のつながりである。「文化の中心は言葉なのだから、いいかえれば、日本語こそ日本人を性格づけるきめ手」である。「そして人間は、15才ごろから、大学を卒業する年令ぐらいまでの間の環境で、その人の母国語が決定され

る。」従つて氏の子供さんたちには、「ブラジル語こそが母国語であり、従つてブラジル人である」と断じて、氏はことばと人間の性質の関連を述べ、氏にとつては、「母国語を決定する年代を日本ですごしたために、日本語以外の言葉が母国語にはなり得ない。」氏を「育成してくれるものは日本語であり、日本文化なのである。」

ブラジル生活の方が、もはや日本で過した年月より長い人が、この言を述べるところにこそ、人間の性質というか、人間としての存在を決定する要素が、ことばといかに密接に結びついているかということを考えさせられる。こういうことを考えてみると、もはやわれわれにとつて、自己のレファレンスを捨てて、相手のレファレンスを会得しようとしても、それは不可能ではないかという気がする。

今一つ興味ある新聞記事を紹介しよう。それは、やはり、朝日新聞に、「アメリカ通信」と題して、江藤淳氏が書かれているものである。氏はプリンストンで、二年間ばかり、日本文学を講じて来られたのであるが、その間、氏はアメリカに居て、英語をしやべり、英語でものを考えるようになりながらも、自分を日本につなげているきづなとしての、万葉集以来今日までの日本の文学と思想の全体をつなげている日本語という言葉の存在をひしひしと感じられたという。それは要請でなく、自発的な結びつきであつたという。米国に在る限り、氏はすべてを英語でしなければならぬ。それなのに、英語は氏の存在の芯に結びついている言葉ではないという意識がある。氏は、この日本語の存在の重さを、次のように述べておられる。「習慣と努力によつて、私は自分の不完全な英語をかなり完全なものにすることが出来るかも知れない。今ですら、必要に迫られて、私はしばしば英語でものを考えている。しかし、リチャード・ブ

ラックマーが、『沈黙の言語』と呼ぶところのもの——思考が形をなす前の淵によどむものは、私の場合あくまでも日本語でしかない。そして、言葉は、いつたんこの「沈黙」から切りはなされてしまえば、厳密には文学の用をなさない。なぜなら、この「沈黙」の部分を通して、私は日本語がつくりあげて来た文化の推積につながっているからである。」たとえ英語でものが考えられても、思考が形をなす前の淵によどむものは、あくまでも日本語でしかないということを、氏はアメリカへ行つて、英語でものを考えるようになって始めて意識されたのである。これはわれわれ日本人が、いかに日本語につながれているかの一つの証拠となる。

この二人の人が外国で感じた、日本語がいかに深く思考、さらには人間としての存在形態にまで影響しているかという事実、これがある限り我々はやはりことばの意味作用の理解において、外国語のレファレンス範囲を会得することが出来ないのではないかと考えられる。こういうふうには、結局、国、環境、習慣等が違えば、いろいろもの考え方、感じ方が違つて来るといふことは、常識的に考えても明らかなことである。ただ問題はそれを法則的にどう捕えるかということである。

読書現象、ことばの理解の際のこういう現象を、法則的にとらえたものの一つに、漱石の、文学的内容は $F+f$ であるという公式がある。ここで F とは認識の要素であり、 f とは情緒の要素である。 F は「人により時により性質に於て、数量において異なるもの」である。従つて、それにつれ f も変化する。ここで f とは、本論でいうレファレンスに等しいものであろう。

意味論の分野で、シュテルンの「意図された意味」と「理解された意味」の差のこと、シュベルパーの「思考の範囲」、バイイの「連

想分野」等の概念は、こういう現象を扱かつたものである。

この現象を、人間の認知、知覚行動の全領域に涉つてとらえたものに、ゲシュタルト心理学でいう「フレーム・オヴ・レファレンス」という概念がある。有斐閣刊の『社会学辞典』によれば、「知覚、判断などの心理的現象の研究において創られた概念。我々の知覚や判断は、対象それ自体の性格を直接に反映するものではない。我々は、対象を、その対象と機能的に関連を持つ他の諸要因（たとえば、過去の経験、あるいは、その対象のおかれている現在の全体的状況）と関係づけて、知覚し、判断を下す。すなわち、我々の知覚あるいは判断は、対象の属性を一定の枠組に関係づけて選択する。この知覚、あるいは判断の基準となる枠を『フレーム・オヴ・レファレンス』という。」

偶然の一致かどうか、ここでわれわれの使つて来た用語レファレンスがここでも使われている。実は以下述べるように、一考してみると、この概念はまさにわれわれのいうレファレンスの問題とピタリと照合する。ただ、観点を置き換えたものである。すなわち、オグデン・リチャーズの三角形で分るように、あるシンボルでもつて、ある指示物（ここでいう対象）を表すとき、そのシンボルの意味は、いわゆる外在的意味である指示物(対象)とむしろ関係なく、その指示物についてのある観念すなわちレファレンス（例えば、鯉なら出世魚、威勢がよい、carp なら ignorant）を含むものであつた。これを反対から云えばわれわれは、そういうレファレンスでもつて、鯉なり carp などの表している指示物を知覚していることになる。そしてそれが、同じ指示物についても、国を異にすれば、一致しないのであつた。この際、そういうレファレンスにあてはめて、対象を判断するというなら、

それはレファレンスの枠（フレーム）すなわちフレーム・オヴ・レファレンスと呼ばれるにふさわしい。上の概念は、このフレーム・オヴ・レファレンスの違いということを法的にとらえたものである。

そしてまた、対象からすれば、それはそれだけのフレームの中に自分の意味づけがあり、そこから眺められるわけであるから、そこが己れの世界、活動範囲のようなものだから、第二章で述べたように、それがレファレンス範囲と呼ばれるにふさわしい。すなわち、一方からすれば枠であるものが、他方からすれば範囲というわけで、この二つの考え方は実は同じことの両面の鏡である。これによつて、われわれのいうレファレンスの違いは、避けられないということは、心理学上の裏づけを持ちうる。

最後にもう一つ別の観点から。文化人類学には辺境人（マージナル・マン）という概念がある。「文化移植された個人（マージナル・マン）は、その新しい社会の文化に従つて、活動したり、思考したりすることは習得できるが、それに従つて感ずるように習得することはできない」というのである。

たしかに、われわれは、例えば carp は、主として池で飼われているので、日本における「井の中の蛙」と同じ意味で ignorant であるというレファレンスを持つということは納得できる。しかしそれは納得づくのことであつて、自然の感じ方ではない。江藤淳氏の云われることもこれと同じことであろう。

ここでこの附記の冒頭に提出した問題に戻ろう。われわれは理解しようとする発言、文学作品のレファレンスを、解説なり、注なりでもつて理解しようと努力する。しかし、たしかに頭での理解は出来るかも知れないが、それに従つて感ずるところまでもは習得することが出来ない。以上紹介した体験、概念が

それを裏づけている。それゆえ、われわれは所詮、外国語、ひいては外国文学においては、マージナル・マンであつて、自己のレファレンスを捨てて、相手のレファレンスを習得することは出来ない。従つて、「誤解のルート」はやはりあくまで「誤解のルート」であつて、「正解のルート」になりえない。ただそれを出来るだけ出来る範囲内で正解のルートに近づける努力をしなければならぬとは云うまでもない。

以上ごく当然のことと云えばそれまでであるが、その必然性を裏づける体験、概念を紹介することに、意義を認めてもらいたい。

注（参考書名のうち訳者の記してないのは原著）

- (1) 自身の経験で知り得る世界。これに対してコトバを通じてわれわれに達する世界を言語的世界という。—S. I. ハヤカワ。
- (2) S. I. ハヤカワ『思想と行動における言語』p. 58.
- (3) 云うまでもないことだけれど、ここではつきりさせておきたいことは、更に改めて後述するように、carp とか鯉というのは、あくまで語（記号）であつて、ものではないということである。そういう意味では、carp が鯉でないことはもちろんのことではあるが。
- (4) C. K. オグデン・I. A. リチャーズ『意味の意味』p. 91.
- (5) ピエール・ギロー『意味論』佐藤信夫訳（文庫クセジュ）p. 32.
- (6) S. ウルマン『意味論研究』山口秀夫訳（英語学ライブラリー）p. 47.
- (7) ウルマン『意味論の原理』p. 72.
- (8) G. シュテルン
- (9) 同じ立場をとる意味論学者は多い。ただ各々自分の術語を使つている。オグデン・

リチャーズ—レファレンス或は思想、シュール等—所記 *signifié*, シュテルン—心的内容 *mental content*, ゴンボッツ—意義 *sense*, ルデー—観念 *idea*, ヴァイスベルガー—概念 *concept*.

- (10) 普通は指示範囲と訳されるが、普通指示と訳されるレファレンスのレファレンス範囲（従来こういう用語はないようである）と区別してこういう訳語をあてる。
- (11) 試みに、詩を読む場合のレファレンスは、視覚感覚が、連続イメージリーを経た後、遊離イメージリーを経たところで、生じて来る。I. A. リチャーズは『文芸批評の原理』第十六章—詩の分析—で絵入りでもつて説く。
- (12) T. H. スヴァルテンゲレン「英語における強意的直喩」佐々木達部分訳（英語学ライブラリー）
- (13) 同一国語内でも *horse* と *steed*, 俱管住宅と長屋、女中とお手伝いさん、床屋と理容師のように指示物は同じでも、レファレンスを異にし、従つて「意味」を異にしているものは多い。
- (14) 注(四)で述べたように、リチャーズによれば、レファレンスはイメージを経過したあとに出て来るものである。イメージよりレファレンスの方が固定性、永続性が強い観念を表していると考えられる。

補註 レファレンスの違いということ意識して、ハロルド・ライト氏が萩原朔太郎の詩集「月に吠える」を英訳する際次のように考えられたということは、正しいことであり、興味あることである。

「先日、『殺人事件』という詩の中で『つめたいキリギリスが鳴いている』という文にぶつかつた。直訳は “A cold grasshopper is chirping.” たが、この英訳ではどうもおかしい。まず *grasshopper* と

いう単語は grass (草) と hopper (とぶもの) の合成語で、草の上をとぶコン虫の意味だ。そのうえ、アメリカにいる grasshopper は全然鳴かないのだ。だからもとの詩の感じを出そうとすれば、キリギリスを grasshopper 以外のなにか鳴く虫に変えなければならない。アメリカでもセミは鳴くので、セミといい変えれば grasshopper よりいいだろうと思つてゐるが、さてどんなものか。」一朝日新聞「すてんどぐらす」

Hemingway の短篇 “A way You'll

Never Be” 中の次の話はこれに関連して読むとおもしろい。

“The grasshopper, you know, what we call the grasshopper in America, is really a locust. The true grasshopper is small and green and comparatively feeble. You must not, however, make a confusion with the sevenyear locust or cicada which emits a peculiar sustained sound which at the moment I cannot recall. I try to recall it but cannot.”